

異世界授業トラック 3 「鍊成の扉」

1 SE	場面切り替え
2 SE	足音/廊下（現代）
3 一ノ瀬	中庭に出た後、本校舎の向かいある建屋に入った。 「C棟（シーティング）」と呼ばれる特別校舎の中はとても見慣れた景色が広がっていた
4 一ノ瀬	ちよつと埃っぽい空気も、タイル敷きの床に擦れる乾いた靴音も、人けがないと不気味さを覚える長い廊下も
5 一ノ瀬	石造りの学生寮や食堂はどうか非日常的な光景だつたけれど、ここは本当にいつも通りの、見飽きていたはずの学校の風景だ
6 一ノ瀬	ここは一体どうなのか——みちるに聞けばすぐに分かるのかかもしれない。 けれど、僕が本当に転入生ならそれくらいのことは知つていねだらうし
7 一ノ瀬	困つたな。どう切り出せばいいか分からない
8 一ノ瀬	ちやんと話を聞けるまで軽はずみなことはしない方がいい——そうは思つても、そんなかしいあつたことをいつまで言つていられるのか
9 みちる	「あんまり面白くない？」
10 一ノ瀬	「——え？」
11 みちる	「（）に初めて来る人つてね、見たことないものばかりです（）」 驚く人がほとんどなんだけど、何かそういう感嘆が無いというか 反応が薄いというか……」
12 みちる	「だからあまり興味ないのかなって」
13 みちる	「もしかして実は体調良くなかったり？ もしそうだったらいめんね、 変に連れまわしちやつたかも。昨日着いたばかりだもんね」

異世界授業トラック 3 「鍊成の扉」

14	一ノ瀬	「ううん、大丈夫。ちょっと考えりゃいいで。」 せつかく案内してやるついでに、ほーいしゃやい。
15	みちる	「本当に… 無理してない…」
16	一ノ瀬	「本当に。それに、面白くないわけじゃないよ。 ただ、知っている場所に似ているからあまり驚いていないのは本當かも。 学校って『』の似たような感じなんだなーってくらい」
17	SE	足音/廊下/窓あわ
18	一ノ瀬	「…」 そつ答べるに田を見開いたままみちるが迫つてきた
19	みちる	「え…？」 「え…？」それだけ
20	一ノ瀬	「え…？」
21	みちる	「『』が学校だつて分かるの？」
22	一ノ瀬	「『』でも何も、学校は学校でしょ？ 少し違うといのもあぬけど、 校舎も廊下も教室も、学校を学校だつて分からない人はいない、と思う んだけど」
23	みちる	「…。タク、ひょいとしてからかってね？」
24	一ノ瀬	「え？ 『』？ そんなつもりは全然ないよ」
25	みちる	「…」
26	一ノ瀬	「…」 胡乱げな瞳が遠慮なくぐんぐん近づいてくる
27	一ノ瀬	「やめ、やめ…」
28	一ノ瀬	「か、顔が近い…」
29	みちる	「おー ((やせんやく)のを見ながら品定め、唸(の)い感じ)」

異世界授業トラック 3 「鍊成の扉」

30	一ノ瀬	琥珀色の大きな瞳がきらきらと揺れる
31	みちる	「まあ、嘘を言つているようには見えないし、本当にいい匂ついているってことか」
32	一ノ瀬	「……はあ」
33	一ノ瀬	「誤解が解けたのはいいけど、一体どうして…」
34	みちる	「わよつと、ね。今言つちやう」ともどきなくはないけれど、せつかくだからもう少しタク自身が自分の目で見た方がいいと思うかな」「余計に分からないんですが……」
35	一ノ瀬	「ふふん。いいからいいかい、ほら早くこい！」
36	みちる	「場面切り替え
37	SE	
38	BGM	【BGM】 やいせりチャコは手作りね - ピアノ
41	一ノ瀬	「くふ、上手いんだ」
42	みちる	「ふく。ありがと」
43	一ノ瀬	「出でる楽器も結構多いね」
44	一ノ瀬	「スマッシュセシットとかマリンバ、シロフォンは定番だけど、なんというか、太鼓？ みたいな、見たことのない打楽器が多い気がする」
45	みちる	「トリウイウム用にひでじの団体も寄付してくるから、じんじん増えしていくみたい。あっちの準備室にはもつと色々あるんだ。珍しいのだと、この間はトーキングドラムが運ばれてきてたかな。トーキングドラムって、もともとは演奏法を示すみたいなんだけど、小さくてやうべ可愛いの」

からすとうさぎ

異世界授業トラック 3 「鍊成の扉」

46	一ノ瀬	「そう、なんだ。もしかしてみちるは音楽系の部活に入つてたり？」
47	みちる	「ぶかつ？」
48	一ノ瀬	「ん？ うん。樂器も多いし、ピアノも上手だし。 何かやつてるのかなと思つたや」
49	みちる	「ぶかつ——ぶかつ……部活？」
50	一ノ瀬	「なんだろう、みちるが考え込むように固まつていて。 そんなに変なこと言つたかな……」
51	一ノ瀬	「吹奏樂部とか、輕音樂部とか」
52	みちる	「ああ、部活ね！ そつか……部活——つて、じやなくて。ううん、部活 はやつてないかな。トリウイウムにはそういう活動はないから」
53	一ノ瀬	「そうちなの？ それにしては上手だつたね」
54	みちる	「休みの日とか、時間が出来た時に弥彦先生に無理言つてちょっと貸し てもらつてゐるの」
55	一ノ瀬	「わのきの曲もその練習の成果？」
56	みちる	「そうちなるかな。出来ればもうちょっと色々弾けるようになりたいんだ けど、今はこれが精いっぽい」
57	みちる	「貴重な物だから本当はあんまり触つちゃいけないんだけど」
58	SE	【効果音】ピアノ
59	みちる	「——、んなに素敵なおのが聴けるんだもの、 もつと楽しまないと損だよね」

異世界授業トラック 3 「鍊成の扉」

60	一ノ瀬	みちる	「たしかに高そうなピアノだよね。僕の学校にもピアノはあったけどもう少し小さかった気がする。弦も見たことないくらい長いし、グランドピアノっていうのかな」
61	一ノ瀬	みちる	「そう、グランドピアノ！ サイキの曲もそうなんだけど、この鍵盤に触れた人達が色々な想いを持つて作ったんだなあって考えると、なんだか胸が熱くなるっていうか、わくわくしてくるの」
62	一ノ瀬	みちる	「音楽だけじゃないんだけどね。言葉もそうだし、数式や文字だってそう。私達の知らないもの、想像もしていなかつたような世界を次々生み出していった人達って本当にすごいと思うんだ」
63	一ノ瀬	みちる	「タクもそう思わない？」
64	一ノ瀬	みちる	「そこまで考えたこともなかつた、っていうのが正直なところかも。というか、そういうことと考えながら勉強している人は初めて見たくらいだよ」
65	一ノ瀬	みちる	「うう……やっぱりそうなんだ……」
66	一ノ瀬	みちる	「そう、だね。みんなに言うと大体似たような反応を返される、かな」
67	一ノ瀬	みちる	「はあ……。あーあ……タクは違うと思つたんだけどなあ」
68	一ノ瀬	みちる	「どうして違うと思ったのかは分からぬけど、僕達くらいの年代ってそういうものじやない？ 後から振り返れば役に立つのかもしれないけどでも、今は無理やり詰め込まれてる感があるのは仕方ないというか」「勉強に対する考え方はどうも変わらないんだね……」
69	一ノ瀬	みちる	「あ、そうだ。タクはあるの写真知ってる？」
70	一ノ瀬	みちる	「みちるが指した先には、これも音楽室の鉄板。埃をかぶつた有名な中世音楽家達の肖像画が並んでいた
71	一ノ瀬	「写真？」	
72	一ノ瀬		

異世界授業トラック 3 「鍊成の扉」

73	一ノ瀬	「なぜだか分からぬけど」ともあるよね、あれ。左からバツハ、モーツアルト、ベートヴォン、ショパン、シユーベルトかな」
74	みちる	「やっぱり分かるんだ！」
75	一ノ瀬	「やいぱり？」
76	みちる	「あ、ううん。こっちの話。でも、たぶん私の周りは誰も分からないと思うかな。みんな同じ（おんなじ）顔に見えて不気味だつて言つくり」
77	一ノ瀬	「うーん。まあ、不気味かどうかはともかく、テストで点を取る以外の目的で覚えようと思う人はあまり居ないかも知れない」
78	みちる	「……もしかしてタクつてば勉強得意？」
79	一ノ瀬	「え、どうだろ。普通？ だと思つけど」
80	みちる	「ね、ちょっと一緒に来てくれない？！ 見せたいものがあるんだ！」
81	一ノ瀬	「あ、ちょ、ちょっとみちる…。」
82	一ノ瀬	なぜだろう。みちるがとてつもなく目を輝かせて腕を引っ張つてくる
83	一ノ瀬	「わ、分かったから。そんなに引っ張らなくて…」
84	SE	足音/教室/窓
85	SE	場面切り替え
86	SE	教室戸開ける
87	みちる	「他のクラスと比べるとちょっと狭いんだけど、遠慮せず入つて入つて」
88	一ノ瀬	「うん、ありがと…」

からすとうさぎ

異世界授業トラック 3 「鍊成の扉」

89	一ノ瀬	「どうしたんだろう。あれからやけに上機嫌みたいだ
90	一ノ瀬	「い」は教室?」
91	一ノ瀬	C棟から降りて食堂が併設されていた本校舎へ戻る
92	一ノ瀬	音楽室の半分ほどの広さで、黒板と正対するように机や椅子が整然と並んでいる。校舎が石造りということもあって雰囲気は少し違うけれど、やつぱり「い」にでもあるような学校の教室だ
93	みちる	「い」は私の、私達のクラスが使ってる教室なんだ。 あの窓側の一番前が私の席だよ」
94	SE	足音/教室（石床）
95	SE	物音/机の中を漁る
96	みちる	「えー、あつたあつた。はい、いれ」
97	一ノ瀬	「教科書?」
98	SE	本/めぐる
99	一ノ瀬	装丁（そういう） わざわざ見た限りの内容も、 僕達が使つててるのと同じだ……でも、それにしても
100	一ノ瀬	「やけに年季が入っているような……？」
101	みちる	「弥彦先生の授業で使うのなんだけどね、 タクならなんとなく分かるかなーって」
102	一ノ瀬	「分かるも何も、これは僕も持つてゐるよ。 そつか、本当に同じ学年だつたんだ」
103	みちる	「やつぱりそなうなんだ。ねね、中読める?」

からすとうさぎ

104	一ノ瀬	「それは、読めると思ひつけど——というか英語やドイツ語みたいな語学ならともかく、世界史の教科書なんだし読める読めないも無いと思つんだけど。」
105	みちる	「それはそうかもしないんだけど……こいから、早く早く」
106	一ノ瀬	みちるの何かを期待するような眼差しが、何故か一段と光を増した気がする。もしも尻尾があつたらブンブンと音を立てて揺れているに違いない
107	一ノ瀬	「う、うん。そただな、こいの間進んだといは——」
108	一ノ瀬	みちるの得も言われぬ迫力に気圧されながらページをめくる。ちよつと古びているけれど、上質紙のさわやかさとしたツヤとインクの匂いに遠くなつていた記憶が少しずつ鮮明になつていく
109	一ノ瀬	「あつた——『皇帝フリードリッヒ二世』とルネサンス』。 ユリウス・カエサルの後を継いだ初代ローマ皇帝アウグストゥスに憧れた孤児フリードリッヒ二世が、アウグストゥスの成し遂げた『パクス・ロマーナ』を再現しようと神聖ローマ帝国の皇帝に成り上がるまでと、その功績について。1200年代中期、中世真っ只中に在位した皇帝だけど、その進歩的な視点はルネサンスの先駆者とも呼ばれる」
110	一ノ瀬	「カエサルのガリア戦記を少し読んだことがあって、その名前が出てきたってだけで妙に嬉しくなつて、いつもは退屈なはずの授業がこの時だけは楽しかったのを覚えてるよ」
111	一ノ瀬	「うん、ちよつどいんな感じだったかな。 みちる達はどいまで進んでるの？」
112	みちる	「……(//思遣いのみ。呆気に取られてはつと呆けている感じ)」
113	一ノ瀬	「みちる~」

異世界授業トラック 3 「鍊成の扉」

114	みちる	「へ？ あ、えつと……だ、大体同じといつかな。ほら、中世って色々な見方があるから全く一緒というわけではないけど——」
115	みちる	「(本当に読んでる……術式も無しで……//独り言っぽい感じ)」
116	一ノ瀬	「そ、うなんだ。たしかにルネサンスの先駆者を見るなら同じ時代にアッシジの聖人フランチエスコもいるし——みちる？」
117	一ノ瀬	「どうしたんだろう。ソラに来てからみちるの様子がおかしい。落ち着きがないというか、何かを焦っているような。かと思えば無言で考え込んだり
118	一ノ瀬	「それにしても——みちるの様子はたしかに気になるけれど、今はこの教科書だ。これは間違いなく僕の記憶にあるものと同じものだ。それはつまり——」
119	一ノ瀬	「ねえ、みちる。良ければ他の教科書も見せてねんでもいいかな？」
120	みちる	「ふえ？ あ、うん。それはいいけど——ソラに向いて、今は他にこれくらいしか持つてないんだけどね」
121	SE	物音/机の中を漁る
122	みちる	「はい、これ」
123	SE	物音/物を渡す。
124	みちる	「今あるのはそれと——日本史と数学かな。 問題集とかもあるけど、ソラはさすがに違うかも」
125	一ノ瀬	「ありがとうございます」
126	一ノ瀬	「へえ、やっぱり同じだ。でもそうだね問題集は違うみたいだ。というか、問題集なのに今年のじゃなく、結構古いやつなんだね」

127

みちる

「ああ、それは——教科書もそういうなんだけど、みんな同じのをやつし
使つていいから、かな」

128

みちる

「たまに新しいのが見つかって共有されねい」とはあるけど、珍しいもの
だとおじさん——弥彦先生達が学生だった頃から使つてたものもあるみ
たい」

129

一ノ瀬

……新しいのが見つかる?

130

みちる

「あ、そうだタク。良かつたらまたちょっと移動しない?
まだ見せたいところがあるんだ」

131

一ノ瀬

「それはいいけど——じゃあ、これしまつておかない?」

132

みちる

「ううん、それはいいの。タクが持つてて。はい、カバンも貸してあげ
る」

133

SE

物音(がさむ)セ系

134

一ノ瀬

「みちるが使うんじゃないの?」

135

みちる

「おひもと寮に戻しておひつじ町^町^{まち}っていたし、たぶんタクにも必要にな
るものだらうから」

136

一ノ瀬

「僕に?」

137

みちる

「うん。詳しく述べあとで弥彦先生に聞くといいんじやないかな」

138

みちる

「いやあいりへか。わよへと歩くけど、そんなに遠くはないか?」

139

SE

場面切り替え

140

一ノ瀬

「ハネバ——」

異世界授業トラック 3 「鍊成の扉」

141	一ノ瀬	本校舎を更に昇り、北の端に位置する扉を開ける。 ちようど学生寮と本校舎が隣接する形になる一室には異質な光景が広がっていた
142	一ノ瀬	「ハリ」が、見せたいといふ？」
143	みちる	「うん。もしかしたらタクは初めて見るんじゃないかな」
144	SE	足音/教室（石床）
145	一ノ瀬	窓からわずかに日が差し込む薄暗い部屋の中央に、腰の高さほどの 窯が大きな口を開けていた
146	一ノ瀬	窓のそばの棚には青や紫、様々な色の液体や錠剤の入った瓶が並び、 窓際のサンルームには、人の背丈ほどの奇妙な植物が鉢から飛び出し鬱 蒼とした影を作っている
147	一ノ瀬	なんだらう、ハの部屋の中は妙に現実感が薄い気がする。晴れていた記憶 はいつの間にか希薄になつていて、ハリかで見たところがあるはずなのに、 あれは一体どうだつたのか思い出せない
148	一ノ瀬	「タクは鍊金術って知つてね？」
149	みちる	「タクは鍊金術って知つてね？」
150	一ノ瀬	「鍊金術？ 鍊金術って……あのゲームとかで出てくね？」
151	みちる	「うん、たぶんその鍊金術で合つてるかな」
152	みちる	「ふいぬつても、きっとタクが知つてるゲームみたいになんでも作れる ようなものではなくて、薬品を合わせて授業で使うものを作るくらい なんだけえ」
153	みちる	「鍊金術が化学（かがく）、化学（ばけがく）の基礎（そ）となつたのは 知つてる？ その思想はともかく、やつていいね！」とはタクも知つてい る化学のそれとあまり変わらないかも」

からすとうさぎ

異世界授業トラック 3 「鍊成の扉」

154 一ノ瀬 錬金術を学校で？ まさか本当に金（きん）の鍊成を目指す訳ではないんだろ？

155 一ノ瀬 「授業で使うものって、もしかして本当に金が鍊成できるかもあるの？」

156 みちる 「どうかな。たぶん、やり方で金を造り出すことは出来ないとは思うけど。あ、でも金よりも面白いものがでもいいことがあるみたいだよ」

157 一ノ瀬 「面白いもの？」

158 みちる 「鉄より硬い氷とか、火を閉じ込めた宝石とか」「面白くないんだ。でもトリウイウムは歴史も長いから、そういう逸話」というか『卒業生の伝説』みたいなのは結構あるみたい」

159 一ノ瀬 「……。みちるはどうして僕にそんな話を？」

160 みちる 「学生でそこまで扱えるようになる人はまずいなくて、私も実際に見たことはないんだ。でもトリウイウムは歴史も長いから、そういう逸話」というか『卒業生の伝説』みたいなのは結構あるみたい」

161 一ノ瀬 「なんとなく、かな」

162 みちる 「トリウイウムを知つてもうなら欠かせない」と思つた。「でも、一番は——」

163 みちる 「なんとなく、かな」

164 一ノ瀬 「なんとなく……？」

165 みちる 「そう。なんとなく」

166 みちる 「でもタクを見ていてそのなんとなくが、やっぱりなつていうのに変わったかな」

167 みちる 「本当はもっと色々見せたいけど、そろそろ先生のところへ行こつか。タクが今考えていねいに、知りたいと思つたところをきいて全部

分かること思つたな」

からすとうさぎ